政府・三井の攻撃のもとで 苦しみ続けるCO患者の近況

療養区分

（7月21日現在調べ）

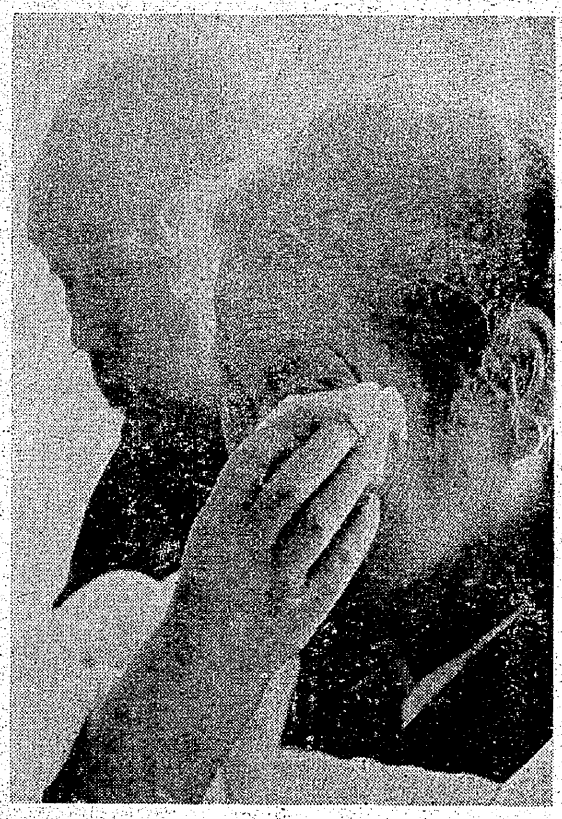
区分	三池労組員	新労組員	合計
長期療養患者	11人	26人	37人
経過観察患者	46人	58人	104人
治療を打ち切られた患者	258人	423人	681人
計	315人	507人	822人

治療を打ち切られた患者の区分（三池労組員に限る）

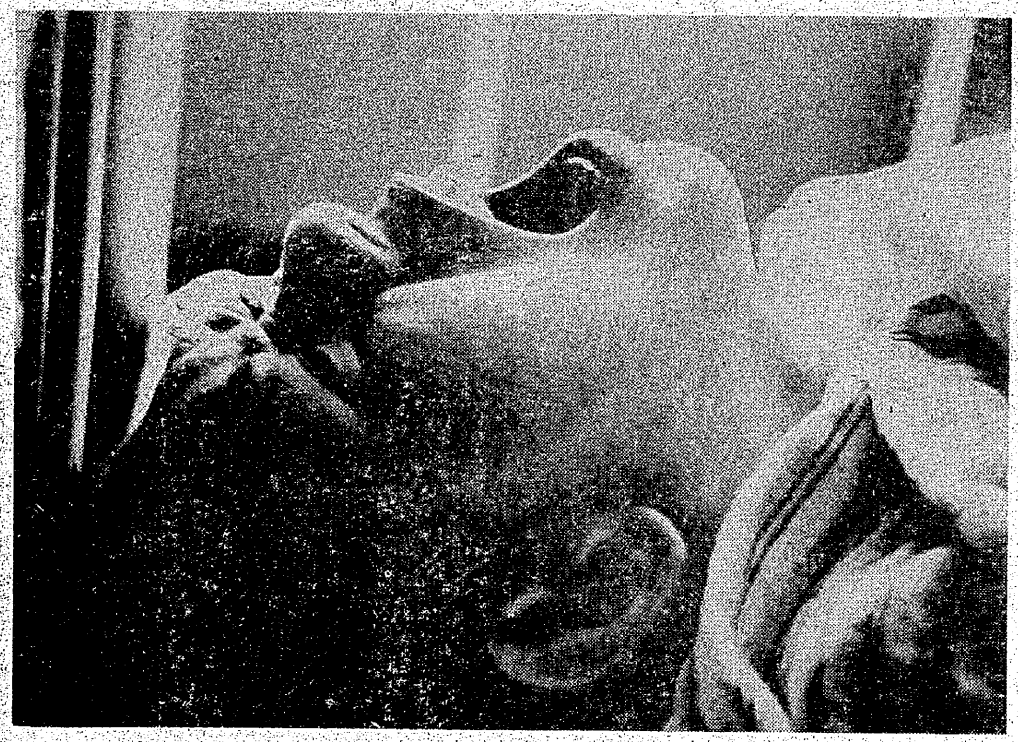
本年1月22日に坑内復帰した人	27人
〃　に坑外に配転された人	117人
本年7月1日から坑外に配転された人	20人
〃　万田訓練所で訓練中の人	43人
治療打ち切りにかかわらず入院している人	6人
その他の人（死亡4人、退転者41人を加え）	45人

入院患者のうちわけ

熊本大学附属病院	11人	大牟田労災療養所	6人
久留米大学　〃	5人	天領町三井本院	2人
九大医学部　〃	4人	大牟田地方労働組合評議会診療所	2人
三池保養院	2人	計	32人



「この子を生き証人として守つてゆく限り、死ぬにも死にきれません」と決意を述べながらつい……



今も、日に何回となく襲いくるケイレンに苦しむ重信さん

CO闘争の中から

第11回

この子が生きつづけること それがCOのたたかい

被災後五年間、いまも意識不明のまま生きる宮島重信さん（28才）のお母さんイシさん（58才）の話

五年間の看病

昭和三十八年十一月九日の三川鉱大爆発は四百五十八名の死者と八百名にものぼるCO中毒患者を出した。

この大爆発は三井鉱山が三川鉱第一斜坑に炭じん（石炭のこな）を多量に放置し、何の対策もしないまま増産を行なったことが原因であったが、検察庁は昭和四十一年八月十三日三井鉱山を不起訴処分にし、責任追及を放棄した。

それを待っていたかのように、CO患者七百三十八名に対する労災補償の打ち切りが強行された。

CO患者家族の会を中心とするCO闘争は、このときから一段とはげしさをました。

宮嶋重信さん（二十八才）は当時弱冠二十三才の転場分会長であった。鉱山学校三年間を首席で通した宮嶋さんは、歌謡曲好きの若ッドの横につきっきりである。いつ襲うかわからないケイレンに備えることや、金具の呼吸穴につまるタンをとりのぞき、大便のためのオシメをとりかえ、直接くくりつけられた小便袋をとりかえることなどは一刻も目をはなせない仕事である。五年間を重信さんとともに文字通り闘病生活をたたかい抜いているお母さんのイシさんは手分会長としてみんなの信頼をあつめていた。その日の朝、社宅の庭に咲いた真白い菊の花一輪を折って、近くに住むお兄さんの家にとどけそのまま出勤した宮嶋さんは、三川坑内にうずまくCOガスの中を分会員をたずね行き来するうちに、体内ふかくCO中毒におかされてしまった。

意識不明のまま翌日になって救出された宮嶋さんは生死の境をさまよいながら、ついに意識を回復することなく、今日まで五年間をすぎている。

熊本大学附属病院の一室に横たわる宮嶋さんには、お父さんの富太郎さん（六十才）とお母さんのイシさんが看病につきっきりである。呼吸はノドを切りひらき、はめこまれた金具がつめたく光る穴から行なわれ、三度の食事は鼻から胃へ五十センチも差込まれるゴムの管から流動食が流しこまれている。いつも三十七度から三十八度の熱がつづき、日に一、二回は全身ケイレンが襲う毎日である。

この五年間両親は重信さんのべつぎのように語っている。

寿命がちぢまる思い

「一日に何回も息をつまらせ、体をまげて苦しむのをみていると私たちの生命がちぢむ思いです。それも五年間……。一口に五年といっても私たちには長かった。こんな姿をみるようなら、いっそ死んでしまった方がいいと思いました。もし私たちが死んだらこの子はどうなるだろうかと思うと、死ぬにも死ねない。

最初の二年間はスキ間だらけの古い木造の病棟で、冬などは居ても立ってもおられないほど寒かった。そのころは重信は体をひねって苦しみながら、夜も昼もねむらなかった。

夜は注射で何時間かねむるだけで、私たちは二十四時間ねむることもできなかった。三年目に当時の太田総評議長が見舞にこられて交渉され、やっと新しい個室にはいるようになった。

五年間の病院ぐらしで、私も主人も体を悪くしてしまって、二人ともここの病院にかかっている。お父さんは高血圧で、私はノイローゼだといわれ、二、三日家に帰ってみたらよくなるだろうと先生はいわれるけれど、また重信のそばにくれば同じことだと思って帰らん。生きているかぎりここにいてやりたい。

私とお父さんの治療費だけでも一、二、三カ月前までは月々一万円ちかく払っていたが、いまでは五千円くらいですんでいる。お父さんは『そげん払わんなら死んでいっちょけ』というが、死んだらどうもならんので治療をつづけているのです」

赤旗をふつてやる

「たくさんの人が見舞や激励にきていただきました。寄せ書きをした赤旗も何枚かもらいました。病室にはっていたら、婦長さんから『病室にはってあるものをとってくれませんか』といわれた。『何をとるのですか。カレンダーですか?』というと『ホラ、赤いのがはってあるでしょうが』といわれ、どうしてもとれといわれるのです。仕方がないのでたたんでなおしているが、選挙のときなど社会党や共産党の候補の車が病室の下を通るときは（病室は四階）ホウキの先に旗をつけて振ってやる。候補者はよろこびますよ」

苦しむことが生きている証拠

「昭和三十五年の分裂以来、三池労組でがんばってきた重信や、たくさんの人たちを殺し傷つけておいて、会社はぬくぬくとしている。二万トン出したといっては、パレードをしてお祝いしている。

私は会社にドナリこんでいこうぐらいたるですョ。二万トン出てよかったと喜こんでいるウラには、こんなに苦しんでいる者がいるとゾというてやろうぐらいたる」

「私も昭和五年まで佐賀の相知炭鉱や岩屋炭鉱に十年間下がって仕事をしてきた。お父さんと結婚して長男が生まれハシカにかかって死んだが、二番目の子がハラの中で三カ月になるまで坑内に下がった。姙娠してからはせまい坑道をハッてスラを引いていたのでハラがつかえて動けないようなときもあった。昭和八年に大牟田にきてお父さんが万田鉱に入った。私も見学に下がったことがあるが、あんな所で炭じん爆発がおこるのはよほど保安の手抜きをしていたにちがいない。せっかく二十三才まで育てて会社からこんなにされてダマってはおれんですよ」

「もし、この子が死んでしまったら会社はいっそうCO患者のことには見向きもせず、『CO患者はもう良くなってしまった』といいふらすだろう。だから、この子も苦しかろうけど生きてもらわねばならない。この子が生きている間は会社は『CO患者は良くなった』とはいえないし、あの三川鉱大爆発をもみ消すことはできんですもんネ」

全国の人びとに話してまわりたい

「もしこの子が手がいらなくなるまで良くなって、私の体がまだ動くならば、私は体がつづくかぎりどこへでも行って三川爆発の話や坑内の話をして、炭鉱に保安を守らせるように、もう少し賃金を上げるように話してまわりたいと思うとります。お父さんは第一組合の数がへっていくことばかり心配していますが、三池労組がいくらへっても人類の数はへらんから心配せんでいい。私たちのような年寄りでも会社や政府のやり方がわかってきたくらいだから若い人たちは必ずわかるようになると思うとります。」

× × ×

宮島さんの住所は熊本市本庄町四八三熊大病院第一内科四〇一号室です。

激励をおねがいします。